

全労済協会 慶應義塾大学経済学部寄附講座

「公共私による新しい福祉価値の創造

～新しい福祉価値をどのように生み出すか～」

第11回 2021年12月21日

「日本人の労働観」

慧日山 福聚寺 玄侑宗久氏

■日本と西洋の労働観の違い

福聚寺の住職をしながら作家として活動をしています、玄侑と申します。今日は、西洋とはかなり異なる日本人の労働観についてお話をしたいと思います。

皆さんの中で「古事記」を読んだことがある人はいますか？ 天照大神が天岩戸に籠ってしまうという話をご存知でしょうか。私は、天照大神は日本初の引きこもりだと思っているのですが、天照大神が引きこもる原因となったスサノオの狼藉のくだりを読むと、天津国に田んぼがあったことや機織りをしていたことがわかります。ここで重要なのは、神々の国で人々は労働をしていたという点で、以来、日本では労働は気高いこと、誇らしいことというイメージが強くなります。一方、西洋ではアルベール・カミュが「シーシュポスの神話」で描いていますが、労働とは巨大な山に岩を持ち上げ、岩が転げ落ちるのをまた持ち上げていくことであり、西洋では労働が苦役なのです。労働に対するイメージが、日本と西洋ではこれだけ違うということ覚えておいてください。

■「はたらく」とは「本来持っている機能を発揮すること」

英語のワーク、ドイツ語のアルバイト、フランス語のトラバークはみな働くという意味ですが、元々の語源はあまり良い意味ではありません。必要不可欠な苦役というイメージです。日本語の「働く」は人偏に動くという字で、動くことが働くことを意味していますが、これは鎌倉時代に日本で出来た文字であり、もともとの「はたらく」という意味はもう少し違ってきます。「覚えず知らず手がはたらきて舞いになり」という例文から、本来持っているしかるべき機能を発揮することが「はたらく」ことだとわかります。

■気候変動がもたらした働き方の変化

奈良・平安時代と、それに続く鎌倉時代の最大の変化はなんでしょうか？ それは、気候変動です。奈良・平安時代には暖かかった気温が、鎌倉時代には相当下がったようです。

「朝廷」という言葉がありますね。これは当時の公務員の仕事場ですが、なぜ朝廷というかという、夜明けとともにそこにいなければいけなかったからです。労働時間が夜明けとともに始まったわけで、温暖な気候がそれを可能にしていました。仕事は昼で終わり、午後の時間は自由です。平安独特の文化が花開いた理由には、暖かさ、自由な時間が午後から夜へと続いたことが挙げられると思います。一般庶民には雑役がありましたが、これを「はたらく」こととは認識していません。

「はたらく」とは、自由な時間にそれぞれの思いを开花させることだったようです。

現代において、今後さらに温暖化が進むようであれば、労働時間を平安時代に戻すということも考えられるかと思えます。鎌倉時代には気温が下がって労働時間も現代並みになり、労働の内容もだいぶ変わりました。次にその説明をします。

■伴と部、それぞれの特徴と弱点

奈良・平安から鎌倉時代にかけて、日本の労働に起こった変化は「伴（とも）」と「部（べ）」の両行です。

伴は昔ながらの労働形態で、部署の壁は薄く、忙しいところを皆で協力して働くのが特徴です。奄美大島に旅行に行った時に、宿の社長さんが自ら送迎をしたり、お茶を入れてくれたりと、伴の働き方が色濃く残っていたのが印象的でした。

部とは専門職の集団で、奈良時代に部の民が朝鮮半島からやってきて、矢作部、犬養部、鳥飼部など専門職毎に部を作りました。部は効率がよく、一つの技を磨いていくのに適しています。部は職人氣質を発達させ、定型発達を促すので、教育には向いています。ただし、そこには常に競争があり、格差の問題を生み出します。伴は、他の仕事も手伝うので仕事全体への理解が進み、皆が仲良く仕事できて和合を促しますが、部のように効率は良くありません。

■効率と和合のバランスを合力で考える

効率と和合のバランスをいかに取るか、「合力（ごうりょく）」として考えてみましょう。例えば「釣りバカ日誌」のハマちゃんは、仕事ができるわけではないのですが、その人がいることで職場が和み、皆が仲良くなって、結局は職場の効率も良くなります。効率一辺倒の考え方では、和合がうまくいかなくなってしまいます。

皆さんが会社の合力を考えるのが難しければ、夫婦、あるいは恋人の合力を考えてみましょう。恋人同士は、どのような椅子に座りますか？ 対面で座ると見える景色が全く違いますし、ベンチに座ると同じ景色しか見えませんが、恋人どうしなら問題ありません。しかしアントニオ・ガウディが作った「夫婦の椅子」という作品は、2つの椅子が90度の角度で開いているものです。これは、首を傾げれば同じ風景を見ることができて、それぞれに正面を見ることがもできます。これを合力ということで考えれば、90度の角度より60度の方が良いかもしれませんが、ガウディはより個を大事にして90度の作品にしたのだと思います。

■今後ますます大事になる、部と伴をミックスした働き方

部における定型発達、つまり階段を登るようにだんだんと上に行くという考え方は人間が進歩するために必要なものではありませんが、きりがありません。仏教は、皆が仏性を頂いており、後はそれを咲かすだけだという考え方です。トレーニングで獲得するものではありません。

これからの働き方で大事なものは、部と伴のミックス具合です。今、会社は効率一辺倒で競い合うシステムで運営されていますが、それによって和合が脅かされ、パワハラが起きたり、同じ職場の中でも格差が生まれてしまっています。日本古来の伴という考え方を、どこかで入れることが大事なのではないのでしょうか。

<文責：全労済協会調査研究部>